

【特集】震災以後の東北を生きる
——その経験を記憶し記述するという——

佐藤 静

本特集は、2018年11月24日に東北大学にて開催された日本現象学・社会科学会第35回シンポジウム「震災以後の東北を生きる：その経験を記憶し記述するということ」においてご提題いただいた方々のうち、渡部純氏（福島県立高校教員・東京大学総合文化研究科院生）郭基煥氏（東北学院大学）の当日の提題内容をもとにした論文を、そして特定質問者を務めてくださった松本行真氏（近畿大学）が当日の質問に加えてご自身の福島県いわき市を中心とするフィールドワークに基づいたご論考を寄せてくださったものを編んだものである。

シンポジウムは、司会を担当した佐藤静（大阪樟蔭女子大学）と提題者のひとりである郭基煥（東北学院大学）によって企画された。学会ホームページに掲載されたシンポジウムの企画趣旨は以下の通りである。

〈企画趣旨〉

東日本大震災から七年が過ぎてもなお、震災に伴って起きた出来事としての津波と原発事故からの復興はまだその途上にある。原発事故の内実は、未だに明らかになっているとは言い難い。地震・津波の被災地域の復興の現状は、今やほとんど報道もされずなかなか知ることができないものとなっている。こうした状況から、震災記憶は風化しつつあるともいわれる。

こうした現状について、生きられた経験を問う学としての現象学は何ができるだろうか。現象学の根幹をなす「事象そのものへ」というテーゼがある。では、その〈事象〉とは何か。これまで、現象学が重きを置いてきたのは、〈一人称の経験〉と〈生活世界〉との関係である。東北について論じる際、その〈一人称の経験〉や〈生活世界〉について問う時、これまでの現象学の枠組みはどこまで有効なのだろうか。都市と漁村・農村で暮らす人々のそれはいかにして記述され、論じられるべきなのか。震災から7年が経過した今、震災以前からの東北の暮らしとそれ以後の時間的な連続性を踏まえつつこの点を掘り下げることが本シンポジウムにて試みたい。

そこで、本シンポジウムでは東北における暮らしの経験を聞き取り記録してきた三氏にご登壇いただきその実際についてお話を伺う。〈東北〉を研究テーマの中心に据え、歴史社会学をベースとしながら領域横断的な研究を進めて来られた山内明美氏には、南三陸をはじめとする沿岸部の暮らしや〈東北〉についてご提題いただく。高校の公民科教員であり、大学院で哲学・思想史研究をしておられる渡部

純氏には、福島県の教員としてそして福島で暮らす者としての震災当時とその後、複層的な現実の諸問題の間における引き裂かれの経験についての提題をいただく。これまで現象学的社会学の知見を応用しながら差別問題について研究する一方、震災以降は被災地における外国出身者に関わる諸問題について論じてきた郭基煥氏には、震災直後から見られた「復興ナショナリズム」に対して、社会内の antagonism (敵対性) (ラクラウとムフ) の自覚に基づく「地域再生」の在り方について論じていただく。特定質問者の松本行真氏には、ご専門の都市社会学および被災地の実地調査に携わられたご経験をもとに、三氏の報告へのコメントをいただく。以上から、フロアとの議論を通じて、震災経験の記憶と記述そのありかたについて問う場としたい。

当日は、〈震災以後の東北を生きる〉というテーマのもとで、その経験の記憶とその記録のあり方について三者三様の提題が行われた。はじめに渡部純氏より「危機において思考することに意味はあるのか：原発事故で引き裂かれた私」、次に山内明美氏「《三陸世界》：復興幻想と失われゆく生業／風土」、最後に郭基煥氏「〈政治的なるもの〉と『復興』：ラクラウとムフの「敵対性」概念から考える」と題して提題がなされた。その後、特定質問者の松本行真氏からの質問のあとで、フロアを交えて活発に議論が行われた。

提題者の渡部純、山内明美、郭基煥の三氏および特定質問者を務めてくださった松本行真氏に、シンポジウム企画者として改めて御礼を申し上げますとともに、ご論考をお寄せくださった方々に心から感謝したい。

(さとうさやか・大阪樟蔭女子大学)